

## まことの都を待ち望んで

(ヘブル11・8～10)

### 一、ヘブル書が語る信仰

ヘブル人への手紙11章は、「信仰」について語られている箇所です。ヘブル人への手紙の著者が語った「信仰」とは、もちろん主イエス・キリストを、神が遣された唯一の贖い主、救い主、神ご自身であると信じる信仰です。ですが信仰は、旧約時代の信仰と重なっておりまして、別ものではありません。旧約時代の信仰者と、新約時代の信仰者でも「ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隸も自由人もなく、男と女もない」が重なっているからこそ、ヘブル書11章は、旧約時代の様々な信仰者を挙げています。信仰とは何なのでしょうか。11章1節が語っています。くさて、「信仰は、望んでいることを保証し、目に見えないものを確信させるものですよ」と。信仰の中心は「まことば」への信頼であり、「神の靈」への信頼であると、私は受け止めています。旧約の人々にとって「みことば」は、「律法(トーラー)」によって現された神の御意思でした。したがって「律法」に従うなら、そこには「神の靈」の働きがあることを知り、経験していました。新約の時代になりますと、「まことば」はイエス・キリスト、またイエス・キリストによって現された善

き知らせであることが明らかにされました。したがいまして信仰は、私共にとりましては、主イエス・キリストを信じることであり、それによって現されている聖靈の働きを、日々知ることです。

### 二、行き先も知らずに

8節を見てまいります。〈信仰によって、アブラハムは相続財産として受け取るべき地に出て行くようにと召しを受けたときに、それに従い、どこに行くのかを知らずに出て行きました。〉とあります。アブラハムが——当時はアブラムでしたが——、相続財産として受け取るべき地に出て行くようにと召しを受けたのは、いつ、どこでのことだったのでしょうか。創世記12章1節より3節に、次のように記されています。

「主はアブラムに言われた。」「あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。」「そうすれば、わたしあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。」「あなたは祝福となりなさい。」「わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。」「地のすべての部族は、あなたによつて祝福される。」と。この、主のことばは、どうで語られたのでしょうか。ハランです。では、アブラハムが力ナンの地へ行くように、主の導きを得たの

は、父テラの一族と共にカルデア人のウルを出て、ハランに着いてからだつたのでしょうか。そうではありませんでした。創世記15章7節に、こうあります。〈全は彼に言われた。「わたしは、この地をあなたの所有としてあなたに与えるために、カルデア人のウルからあなたを導き出した主である。〉

ちなみに、創世記11章31節の記述によれば、当初テラはカナンの地に行くことを考えていましたようにも読みます。ですがハランまで来ると、彼らはそこに住んだとありますので、カナンの地に行くように促したのはアブラハムです。アブラムが力ナンの地に行つて何が待ち受けていたのかを知らずに行くのは、妻のサライ、甥のロト、ハランで得た人たちを抱える身としては、不安で不安でたまらなかつたはずです。しかし「主が導いておられる、したがつて主が共におられる」という信仰だけが、アブラムを支えるものでした。そういう考え方で、信仰に立つとは、全く恐れがなくなることではなく、信仰に立たなければ、すぐに恐れに支配されてしまうのです。当時、物事を比喩的に解釈する考え方が流行っていました。信仰者は、その信仰が深められれば深められるほど、現世において幸いを得ようとする気持ちは薄らぎます。現世だけに重きを置きますと、必ず失望することになります。神が支配される王国は、目に見えない形で現れているからです。私は世にあって、みこころが地にもなるようにして住み、同じ約束をともに受け継ぐイサクやヤコブと天幕生活をしました。堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都の設計者、また建設者は神です。」とあります。何が語られているのでしょうか。

### 三、まことの都を待ち望んで

9節、10節を見てまいります。〈信仰によって、彼は約束された地に他国人の

ようにして住み、同じ約束をともに受け継ぐイサクやヤコブと天幕生活をしました。堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都の設計者、また建設者は神です。」とあります。何が語られているのでしょうか。アブラハムが力ナンの地に入つてから、その地がアブラハムの所有として与えられると、主から語られた土地であったのに、〈他国人のようにして住んだ〉ということです。息子のイサクも、孫のヤコブも同じであつたと語られています。〈天幕生活〉をするとは、まったくの無防備な生活です。患者たちは、力ナンの地に行つて何が待ち受けていた可能性が大きいです。アブラムが力ナンの地に行つて何が待ち受けていたのかを知らずに行くのは、妻のサライ、甥のロト、ハランで得た人たちを抱える身としては、不安で不安でたまらなかつたはずです。しかし「主が導いておられる、したがつて主が共におられる」という信仰だけが、アブラムを支えるものでした。そういう考え方で、信仰に立つとは、全く恐れがなくなることではなく、信仰に立たなければ、すぐに恐れに支配されてしまう性質のものであることを、知つておく必要があります。